

木〈け〉やり音頭〈おんど〉（兵庫区）

「おーい。船が見えたぞー。」

「やあー。きたぞ、きたぞ。」

和田の岬〈みさき〉をまわった船の数が、しだいに多くなってきました。浜では大ぜいの人びとが集まって、船が港へ入るのをまっています。

「だれか。早く、お知らせにいけ。」

「よし。お館〈やかた〉まで、ひと走りだ。」

「うん。そうだ。みんなを呼びにいこう。」

この多くの船には、瀬戸内〈せとうち〉や九州からの木材や石材がいっぱい積んであるのです。

これは今から、八百年ほども昔のはなしです。平清盛は、早くから兵庫という土地に目をつけていました。保元〈ほうげん〉・平治〈へいじ〉の乱で勝利をおさめた平氏の勢いは、ますます強くなるばかりでした。そこで清盛は兵庫に島をきずき、大きな船がはいれる港にして、宋〈そう〉国との貿易をはじめようとしたのでした。難工事だった築島〈つじま〉もでき、西国からの船が兵庫の港にもはいるようになりました。それまでは、街道沿いのさびしい村だった兵庫の浜も、ようやくにぎやかになってきたのでした。

治承〈じしょう〉四年（一一八〇年）清盛は、都を京都からこの地福原に移しましたが、なにぶん急なことなので、都としてのかたちがまだできていません。また、都を移ることにしても、京の人びとの中には反対の人もたくさんいるのです。道路は、風の日にはほこりがまいあがり、雨の日にはぬかるでしまいます。家も手せまで十分ではなく、京の都とくらべものになりませんでした。清盛は、早く都らしい街並〈まちな〉みを作りたいと思い、西国から建築用材などを運ばせているのです。

「さあ、みんながんばるんだぞ。」

しかし、用材を運ぶ仕事はなかなかたいへんです。みんなは、疲れてしまいました。手の動きや足の運びもにぶりがちです。

「よーし。みんな。」

一人の若者が木材の上にとびのりしました。そして、手ぬぐいをむこう鉢巻にしめなおし、身ぶり手ぶりを入れて大きな声でうたいだしました。

祝いめでたの 若松さまよ
枝も栄えて 葉も茂る

「そんな歌なら、わしも知っているぞ。」

「さあ、みんな、うたえ、うたえ。」

御代〈みよ〉は治まる 思うことかのた
末は鶴亀〈つるかめ〉五葉〈ごよう〉の松

ふしまわしや歌詞は、どこにでもある木やり音頭のようにでしたし、また、兵庫の津で舟子〈ふなこ〉たちが歌った“お船唄”にも似〈に〉ているようでした。

つぎつぎに歌っているうちに、兵庫という土地のことがらがいっとうたにかわっていきました。

兵庫名所 七宮祭り
和田の笠松〈かさまつ〉 築島寺

梅は岡本 桜は生田
松は兵庫の湊川

摩耶〈まや〉の高嶺〈たかね〉に 雲井の空よ
さらす布引〈ぬのびき〉 滝の水

花の須磨〈すま〉寺 若木の桜
残る青葉の 一の谷

平清盛が、夢かけてつくらせた福原の都も、半年あまりで京へかえることになってしまいました。

都はなくなりましたが、兵庫の港は残りました。兵庫の浜の人びとが、木〈け〉やり音頭〈おんど〉を歌い、踊りながら用材を運んだのが、いつしか、兵庫の津の氏神である七宮〈ひちのみや〉神社のお祭りの名物として伝えられてきました。兵庫には、十二の浜があって、木やり音頭はそれぞれの浜に伝えられていたのですが、今では西出町〈にしでまち〉にだけ残っています。

